資料２

平成 22 年 9 月 1 日

「“木の家づくり”から林業再生を考える委員会」

住宅改修と国産材

(社)全国中小建築工事業団体連合会　　会　長

一般社団法人　工務店サポートセンター　理事長　　青木　宏之

① 全建連の紹介

１９７１年発足、１９７４年社団法人全国中小建築工事業団体連合会として国土交通省（総合政策局）（住宅局）より認可された公益法人でわが国唯一の「工務店経営者の全国組織」です。

全国の工務店団体７５団体で構成されています。

元請工務店の平均像は新築１～５棟、あとは増改築業、社員は大工共５人位。

約１万社の工務店+約２万人の１人親方―今まで大量にストックを新しい技術で改修するのが仕事。

② 在来木造軸組工法

・日本の国の豊富な森林資源（日本の木）のもと、自然発生したオープン工法（日本の家）１人前の大工なら誰でも作り改修できる

・熟練した大工により手道具で作れる（日本の技)、今は８割強が工場での機械プレカット。

・建築資材は地域にある木・石・土・紙等の自然素材。燃やすことにより元に戻る（環境にやさしい)。

・地域ごと、気候条件によって多少の異なりはある（特に雨・風）

・大地震の度に工夫され、改良されてきた（１００年以上もっている家は地盤に関係）

・素材を扱う技能者（大工・左官・建具・林業・屋根等）も素材により訓練され育ってきた。

・現在これに新しい技術を加え長期優良住宅で１００年以上使えることを目指している。

全建連で取り組んでいる技術講習（増改築部門）

耐震工務店が診断から補強までできるように

・（財）日本建築防災協会と連携→２日間連続の講習会―現在全国で指導者６００名

省エネ省エネリフォームマニュアルを使用し講習会

・（財）省エネルギー機構と連携―現在全国で指導者８０名

・CSABEE 戸建評価員講習―評価員取得）（財）省エネルギー機構と連携

バリアフリー高齢者リフォームカウンセラー講習

・（財）高齢者住宅財団と連携―マニュアル作成済

・高齢者居住安定化モデル事業（３年間）―マニュアル作成（国土交通省補助事業）

全般　増改築相談員講習会―（財）リフォームセンターとの連携

住宅改修

①住宅設備機器の交換

②内外装のリニューアル

③耐震・省エネ・バリアフリーの性能アップ改修

全建連の工務店にとって

①は従来工務店の仕事であったが、近頃家具量販店・ホームセンター・メーカー直接と価格で勝てない（取り付け工事も大工ではない）

②内外装のリニューアル

外装

・セメント系サイディング、又塗装は専門業者

国産材の板を貼ることこそ工務店の仕事

・平成 13 年の改正により既存住宅が防火構造の場合木を貼ることは、防火上有利の方向へ→木が貼れるようになった

（貼り方に昔の知恵を生かす）

内装　（内装は大工でなければ貼れない）

（床）一般に針葉樹は柔らかいので洋風化に伴い輸入の広葉樹、又は合板が使われてきたが、最近国産材の流れで檜・杉・カラ松等が使われ始めている。

（壁）近年 PB＋クロスが主流だったが、杉・檜・カラ松・さわら・青ヒバ等が使われ始めた。

（天井）梁・柱があらわしの構造の場合ムクの杉板等が使われていたが、和室は合板が多かった。
近年、国産材の板が安くなり使われ始めた。下地材もクギからビスに代わり、木材が使えるようになった。

③耐震・省エネ・バリアフリー改修（技術力が必要）

・国産材の適材適所の使用が必要
・腐り、シロアリ対策
・針葉樹は、滑りにくい
・内装がムクの木だと手すりの取付が容易
・床・壁・天井をはがす大改修が多いので新しい国産材の使用を考える。

結論：国産材を使うことは国益に通じると考える

・国産材が充分太くなったので柱・梁を取ったまわりで板を作り使う（構造・内装・外装）
・床材・家具材用の広葉樹も考える（集成技術）
・外壁に国産材を使用することで街並みがそろう
・木はエネルギーである―国産材は太く使う
・全建連の工務店は小規模のため国産材の少量物流と合った調達が得意である。
（又、大工の手間のかかる仕事は大手はやらない）
・国産材使用比率５０％以上を目指す。

写真

床（檜）

壁（檜）

壁（青ヒバ・浴室）

天井（杉）

外壁（工事前）

外壁（工事後）

モデル

光明寺

外壁（杉）